

# フィールドスタディー「渡来文化の諸相」

平成28年度大東文化大学秋期オープンカレッジ（東松山キャンパス）

## 渡来文化の諸相

### <フィールドスタディー>

引率講師：坂本 和俊 / 先生（講座講師）

☆日時 平成28年11月26日（土）※雨天決行	
》集合場所	◎第一集合地 東松山キャンパス・管理棟前駐車場 9：00 集合 ◎第二集合地 東上線高坂駅西口朝日興産前 9：10 集合 ※フィールドスタディーの参加・不参加、及び集合地を11月19日（土）までにご提出ください。 (当日不参加になった場合は必ずセンターにご連絡ください。)
》日 程（予定）	9：00 東松山キャンパス出発→9：10 高坂駅出発→（羽生PA休憩）→下野薬師寺歴史館→しもつけ風土記の丘資料館（昼食、下野国分寺跡・甲塚古墳自由見学）→栃木市おおひら歴史民俗資料館・おおひら郷土資料館→（羽生PA休憩）→高坂駅→大東文化大学東松山キャンパス（解散）

ここは下野薬師寺歴史館





甲塚古墳出土の機織型埴輪についての新聞記事が所狭しと並べられている

甲塚古墳出土機織型埴輪関連記事一覧

平成26年3月6日(木)



アサヒ



産経新聞



読売新聞



下野新聞



東京新聞



朝日新聞



こんな記事も

# 下野薬師寺関連記事

2016年(平成28年)3月4日(土曜日)

下野新聞



和風園芸中心の旧薬師寺境内遺構(上野)。(前)下野新聞掲載  
の航空写真

下野市教委

## 豪族・下毛野氏の館か

### 薬師寺隣で巨大遺構発見

【上野】市教委は五日、和風園芸センターの敷地内に、かつての薬師寺境内に属する巨大な遺構を発見した。遺構は長方形で、東西約100メートル、南北約50メートルにわたる。市教委は、この遺構が下毛野氏の館であったと推定している。下毛野氏は、平安時代中期に下野に勢力を伸ばした豪族で、薬師寺の建立に貢献したとされている。発見された遺構は、土壌の色や形状から、平安時代中期のものと見られる。市教委は、この遺構の調査を進め、その詳細な構造や用途を明らかにする予定だ。

市教委は五日、和風園芸センターの敷地内に、かつての薬師寺境内に属する巨大な遺構を発見した。遺構は長方形で、東西約100メートル、南北約50メートルにわたる。市教委は、この遺構が下毛野氏の館であったと推定している。下毛野氏は、平安時代中期に下野に勢力を伸ばした豪族で、薬師寺の建立に貢献したとされている。発見された遺構は、土壌の色や形状から、平安時代中期のものと見られる。市教委は、この遺構の調査を進め、その詳細な構造や用途を明らかにする予定だ。

市教委は五日、和風園芸センターの敷地内に、かつての薬師寺境内に属する巨大な遺構を発見した。遺構は長方形で、東西約100メートル、南北約50メートルにわたる。市教委は、この遺構が下毛野氏の館であったと推定している。下毛野氏は、平安時代中期に下野に勢力を伸ばした豪族で、薬師寺の建立に貢献したとされている。発見された遺構は、土壌の色や形状から、平安時代中期のものと見られる。市教委は、この遺構の調査を進め、その詳細な構造や用途を明らかにする予定だ。

下野薬師寺歴史館屋上から前方に下野薬師寺跡を見たところ





これは西回廊のライン(柱の位置を示す)で、向こうに復元された回廊建物の一部が見える





さて、正面は下野薬師寺跡の中枢部に所在する安国寺の山門



「史跡 下野薬師寺跡」と記された標柱が立つ



こんなものも



説明板が立っている



これが下野薬師寺伽藍の礎石という



下野市

指定有形文化財

しもつけやくしじがらんそせき  
下野薬師寺伽藍礎石

指 定 昭和六十年十二月六日

所有者 安 国 寺

この礎石は民家の人とうとうわこが東塔跡付近から掘り出されたものと言われており、どの堂塔どうとうの礎石か明らかではありません。

礎石面の中心にみられる円形状の穴は、ほぞ穴で柱根に出ほぞを造り、ここにはめ込んであったものと推定されます。凝灰石ぎょうかいがん製とみられるこの形式の礎石は、白鳳時代はくほうに盛行したものとされています。

隆盛期の下野薬師寺の壮大な伽藍も現今ではわずかに礎石と書見などが残っているだけで、往時を再現する手がかたとして貴重じゆうな資料の一つにもなっています。

昭和六十一年九月

安国寺本堂



# 安あん 国こく 寺じ

安国寺は暦応二年（一一三二）、足利尊氏が古代の国分寺にならって全国に安国寺を建立した際、下野国には薬師寺が存在するところから安国寺を建てることなく、そのまま安国寺と寺名改称したと伝えられている。

当時はまだ下野薬師寺の伽藍配置が姿を留めていたと考えられるが、元龜元年（一五七〇）に北条氏政の兵火によりその大半が焼失したと伝えられている。

現在は、真言宗の寺院で薬師如来を本尊とする。その境内は、七世紀後半に創建された日本三戒壇の一つとして知られる史跡下野薬師寺跡の中枢部に位置しており、白鳳文化の香りを現在に伝えている。

現在の本堂は明治三八年に再建されたもので、近世以前の建物は六角堂と山門の一部を残すのみである。

平成八年三月



これは安国寺六角堂



下野市指定有形文化財

六角堂

指定 昭和六二年一月六日  
所有者 安国寺

安国寺の六角堂は、かつての下野薬師寺戒壇跡と伝えられる所に建てられています。江戸時代には、釈迦堂と呼ばれ、その姿は、文化二年（一八〇五）に刊行された『木曾路名所図絵』によっても確認できます。

現存する建物は、近年に修繕された部分も少なくありませんが、部分的に江戸時代後期の様式をとどめています。また、その名の通り建物の形、さらに屋根・外回りの柱・礎石までが正六角形造りの県内でも珍しい仏堂です。現在では、下野薬師寺跡のシンボリックな存在にもなっています。

内部中央には、鑑真和上の画像を収めた厨子が安置されており、両脇には、木造の不動明王像・韋駄天像などが祀られています。

平成七年十月

下野市教育委員会

さて、ここはしもつけ風土記の丘資料館





これが甲塚古墳出土の機織型埴輪





新石器時代的陶器

1. 新石器時代的陶器  
2. 新石器時代的陶器  
3. 新石器時代的陶器  
4. 新石器時代的陶器

新石器時代的陶器

栃木県 下野市

かぶとづか

はたおりがた

## 甲塚古墳出土機織形埴輪

甲塚古墳は、墳丘1段目に幅の広い平坦面を持つ全長約80mの帆立貝形前方後円墳で、6世紀後半に築造されたと考えられます。墳丘1段目の幅約14mある平坦面の中心部付近に円筒埴輪が一行に廻ることが確認されました。この埴輪列の墳丘西側括れ部付近からは、形象埴輪が復元できるもので24基出土していますが、この形象埴輪列中心から機織形埴輪が人物を伴い、2基出土しました。今回出土した埴輪は、人物埴輪7が機台を持つ地機で新しい形式のもの。人物埴輪8が機台を持たない原始機です。



人物埴輪7・8 出土状況



人物埴輪7 復元状況(地機)



人物埴輪8 復元状況(原始機)

### 地機(じばた)

地機は、近年の発掘調査により6世紀前半頃(滋賀県斗西遺跡)から経巻具などの木製品の部材が出土していることから日本でもこの頃には使用されていたことは判名していましたが、全体像は不明でした。しかし、甲塚古墳出土の人物を伴う機織形埴輪が出土したことにより、組み上がった状態での形状を示す例が皆無であった地機について、稼働状態に組んだ形の機織機の構造が明らかになった、日本初の事例です。

人物埴輪7とした機織形埴輪は、宗像大社に「金銅製高機」として所蔵されている雛形と細部については検討の余地がありますが、近似した構造になると考えられます。

### 原始機(げんしばた)

原始機は、弥生時代から古墳時代後期頃までがおもに使用されていた期間ですが、実際に日常的にはいつまで使用されていたかは不明な点も多く、民俗例からの類推にとどまります。

原始機は経保持法により直立式と輪状式の2つに大別できますが、この埴輪は形状的に輪状式の原始機と考えられます。ただし、経部分は経送具下部で埴輪基台天井部に接合して、省略した表現がされており輪状を呈してはいません。

今回はほぼ完全な形で原始機をかたどった埴輪が出土したため、実際に織る状態を再現する点で、今まで類例が無い稀有な例になります。この機を織っている人物は体部が出土しておりませんが、腕が出土しており胸輪(鎖)を着けていることから女性と考えられます。

### 機織形埴輪出土の意義

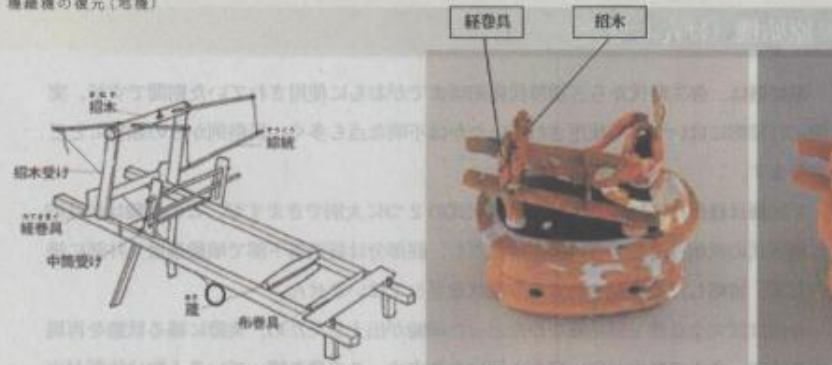
全国各地の発掘調査により、6世紀前半頃の遺跡から機織機の部材は出土していましたが、いずれも木製品のため遺存状況が悪く断片的なもので全体像が判りませんでした。

今回、新旧2種類の埴輪が出土したことにより、6世紀後半におけるこのような機織機存在のみならず、組み立てられた様子が甲塚古墳の埴輪によって初めて明らかになりました。

甲塚古墳から出土した形象埴輪群が何を意味しているのかは、すぐには結論ができませんが、新旧2種類の機織形埴輪が形象埴輪列の中心付近に配置されることから、機織りが甲塚古墳の被葬者に重要なものであり、この被葬者が機織りに関っていた人物であった可能性が考えられます。

※機を織るという行為は、「古事記」に太陽の女神である天照大御神が、神に捧げる衣を服織女に織らせていた。という内容の記述があり、神聖なこととされていました。現在でも伊勢神宮では、神饌衣祭として神に和紗とよばれる絹織物と荒紗とよばれる麻織物をお供えするための神事がおこなわれています。

機織機の復元（地機）

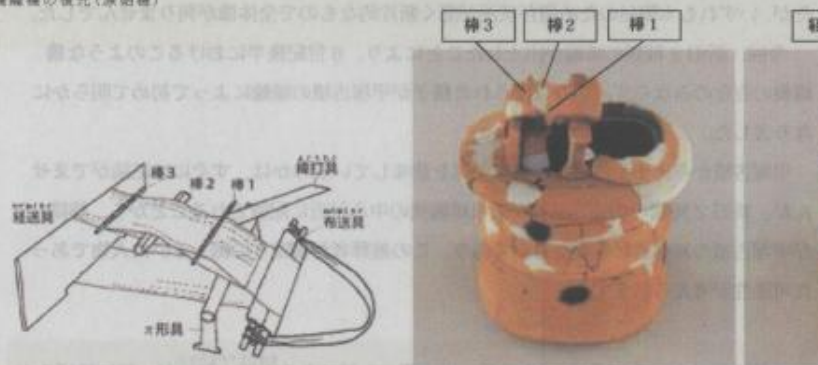


写真解析から3次元グラフィック（株）リッケイ作成

※機織機の復元図は、宗像大社に「金銅製高機」として所蔵されている雛形を参考に作成しました。甲塚古墳から出土している埴輪は、中筒受けに該当する場所に部材が剥離した痕跡はありますが、欠損していてわかりません。

※この埴輪は、基台天井部が欠損しており基台上部に埴輪を復元できないため、3次元のコンピュータグラフィックにより欠損している基台天井部と人物埴輪に施されている彩色を復元しました。

機織機の復元（原始機）



※輪状式原始機の復元は、東村純子氏の著書「考古学からみた古代日本の紡織」中の復元例を参考におこないました。図中の棒1～3は実際には何の部材に該当するか不明なためこのような表示としました。また、形状からπ形具としたものは、群馬県の上細井稲荷山

古墳から出土している石製祭具によく似たものがあります。この機織機には彩色が施されており、基台の天井部には黒彩がπ形具の脚には灰彩、経糸表現には白・灰・赤彩が施されています。また、人物の上衣と裳にも白彩が施されています。



ここは下野国分寺跡



下野国分寺跡 周辺案内図  
 The Remains of Shimotsuke-Kokubunji Temple Vicinity Map



# 1. 時代背景

## はじめに

国分寺が造られたのは、今から約 1250 年前。皆さんはそのころの様子やなぜ国分寺が造られたのか想像できますか？

## 律令国家の成立

飛鳥・藤原京の時代、「日本」という中央集権的な国家をつくるため、唐(中国)の法律を参考に西暦 701(大宝元)年、大宝律令たいほうりつれいがつくられました。この法律制定事業には、下野市と関係の深い下毛野朝臣古麻呂しものあそみふるまろが深くかかわっていました。その後、都が平城京へいけい(現在の奈良市・710～784年の74年間)に置かれたこの奈良時代に、下野国分寺と尼寺は造られました。

律は罪と罰を定めた刑法、令は国を治めるしくみを定めた法令

## 天平の光と影

聖武天皇の時代、律令制度が整い国家の力が全国に及ぶとともに、唐や東アジアなどとの交流により、国際色豊かな天平文化が花開きました。

しかし、この華やかな時代背景の一方で、現実の社会の動きと律令制度の間で様々な矛盾があらわれてきました。西暦 729 年には、年号が神亀から天平にかわりしました。この「天平」改元の背景には、伝染病の流行、災害、政治の混乱など、不安と苦悩から逃れたいとの願いがあつたとも言われています。



平城宮大極殿  
(へいじょうきゅうたいでくでん)

## 国分寺関係年表

740(天平12)年	6月	国ごとに法華経10部を写し、七重塔を建てさせる。
741(天平13)年	1月	故太政大臣藤原不比等の封戸5000戸を返上し、そのうち3000戸を諸国国分寺の丈六仏を造る費用に充てる。
	2月	聖武天皇による国分寺建立の詔。
742(天平14)年	5月	諸国に国分寺の僧尼を選び定めさせる。
743(天平15)年	10月	大仏造立の詔を発する。
744(天平16)年	6月	諸国で毎年稲四万束を貸出し、利息の種を国分尼寺建立費用に充てさせる。
	10月	国司と共に国師(※)も国分寺造営に参画させる。
745(天平17)年	11月	国分寺の用地を定め、造営に努めさせる。また、実力のある郡司に建設を担当させる。寺田を追加しそれぞれ100町とする。
749(天平勝宝元)年		この頃、国分寺の建設の資材や費用を献納した氏族に位が与えられる。国分寺造営の本格化。
752(天平勝宝4)年	4月	東大寺の大仏開眼。
754(天平勝宝6)年	1月	唐僧鑑真和上来朝。
756(天平勝宝8)年	5月	聖武太上天皇没。6月 聖武太上天皇の一周忌までに必ず国分寺の丈六仏を造り終え、その後引き続き金堂・塔を造るよう命じる。
761(天平宝字5)年	1月	下野薬師寺に戒壇設置。6月 諸国国分尼寺に阿弥陀丈六仏、髻持菩薩像二体を造らせる。
766(天平神護2)年	8月	国分寺の堂塔を修理させ、この頃、倍増されていた尼僧の待遇などを定める。
770(宝龜元)年	8月	道鏡を造下野国薬師寺別当として下野国に配流。
818(弘仁9)年	7月	東国(関東地方)で大地震。北関東の被害甚大。
847(承和14)年	4月	下野国分寺塔会(塔で開催された儀式。下野薬師寺・大慈寺僧も出席。)
869(貞観11)年	5月	陸奥国で大地震。津波による被害甚大。
871(貞観13)年		諸国国分寺に一万三千面仏像一舖を安置させる。
939(天慶2)年	2月	平将門の乱。
	12月	平将門により下野国府包圍される。この時、将門軍に下野国分寺が焼かれたとの伝説がある。

※国師とは、国司とともに中央から諸国に派遣され寺院の管理監督、国分寺造営の指導に携わった。795(延暦14)年講師と改称。

## 2. 国分寺建立について

### 国分寺建立の目的

700年代の中頃、飢饉や病気の流行、地震などの災害、貴族の対立や政治の混乱により社会に不安がひろがりました。741(天平13)年、聖武天皇は大陸から伝わった仏教の教えで国が安泰なることを願ひ、当時60余りの国ごとに国分寺と国分尼寺を造ることを命じました(国分寺建立の詔)。この建立の背景には、聖武天皇とともに妃である光明皇后の仏教への厚い信仰があったからといわれています。

僧寺には、像高一丈六尺(4.8m)の釈迦如来像や脇侍菩薩二体、四天王像が安置され、尼寺には阿彌陀丈六仏や脇侍菩薩二体などの仏像が安置されました。

### 国分寺の正式名称

国分寺は、正式名称を「きんこうめいしやんてんわくごころのてら金光明四天王護国之寺」、国分尼寺は「ほっけつざいりのてら法華滅罪之寺」といいます。これらの名前は、さまざまな災いから国を守り、人々が豊かに暮らせることを祈るための経典を参考に付けられました。

また、全国に造られた国分寺は、国の予算で運営する国営のお寺でした。国分寺には20人の僧、尼寺には10人の尼を置くことが決められていました。僧たちは国の安泰のために経典を学び、修業をしました。定期的に勉強会を開催し、災害や病気の流行があった時には特別の法会が行われました。

国分寺は、現代に例えると大学や研究機関のような役割のため、今のお寺のように一般の人のためにお葬式は行いませんでした。また、個人のお墓は国分寺や尼寺にはありませんでした。



東大寺金堂 (奈良市)  
写真提供: 奈良市観光協会



法華寺本堂 (奈良市)  
写真提供: 法華寺

# 3. 全国の国分寺

## 1 全国の国分寺の所在地

国分寺の建設地を選定するにあたっては、「国分寺建立の詔」に国華にふさわしい好処を選ぶことが命じられています。好処の選定は寺院に限らず、都城・国府などにおいても重要なことであり、当時は中国の思想にもとづく四神相応の土地が好処とされていました。

「建立の詔」に記載されている内容や諸国の国分寺の調査成果によって得られた情報を整理すると次のようになります。

### 地理的条件

- ① 国華として仰ぎ見るのによい地形
- ② 水害の憂いなく長久安穩の処(安全な場所)
- ③ 南面(向)の土地。都市計画的条件に優れているところ
- ④ 人家の雑踏から離れている
- ⑤ 人が集合しやすいところ(交通至便の地)
- ⑥ 条里制区画(方形地割にもとづく土地制度)の及んでいるところ(開けた場所)

### 政治的条件

- ⑦ 国府(役所)に近いところ(国司が国分寺を監督したことによる)

山陽道	
備前	僧寺 兵庫県姫路市
美作	僧寺 岡山県瀬戸市
備前	僧寺 岡山県赤松市
備中	僧寺 岡山県総社市
備後	僧寺 広島県福山市
安芸	僧寺 広島県東広島市
河内	僧寺 山口県防府市
河内	僧寺 山口県防府市(推定地)
長門	僧寺 山口県下関市

山陰道	
丹波	僧寺 京都府亀岡市
丹波	僧寺 京都府京都市
丹後	僧寺 京都府京都市(推定地)
但馬	僧寺 兵庫県豊岡市
因幡	僧寺 鳥取県鳥取市
伯耆	僧寺 鳥取県倉吉市
出雲	僧寺 島根県松江市
石見	僧寺 島根県浜田市
隱岐	僧寺 島根県隠岐郡隠岐の島町

北陸道	
若狭	僧寺 福井県小浜市
越前	僧寺 福井県越前市(推定地)
加賀	僧寺 石川県小松市
能登	僧寺 石川県七尾市
越中	僧寺 富山県高岡市(不明)
越後	僧寺 新潟県上越市
佐渡	僧寺 新潟県佐渡市(不明)

東山道	
近江	僧寺 滋賀県甲賀市(推定地)
美濃	僧寺 岐阜県大垣市
飛騨	僧寺 岐阜県不破郡藤井町
信濃	僧寺 岐阜県高山市
上野	僧寺 長野県上田市
上野	僧寺 群馬県高崎市
下野	僧寺 栃木県下野市
陸奥	僧寺 宮城県仙台市
出羽	僧寺 山形県酒田市(推定地)
出羽	僧寺 (不明)

西海道	
筑前	僧寺 福岡県太宰府市
筑前	僧寺 福岡県太宰府市(推定地)
筑後	僧寺 福岡県久留米市
筑後	僧寺 福岡県久留米市(推定地)
豊前	僧寺 福岡県京都市みやこ町
豊後	僧寺 大分県大分市
豊後	僧寺 大分県大分市(推定地)
肥前	僧寺 佐賀県佐賀市
肥後	僧寺 熊本県熊本市
日向	僧寺 宮崎県西郷市
大隅	僧寺 鹿児島県霧島市
大隅	僧寺 鹿児島県霧島市(推定地)
薩摩	僧寺 鹿児島県薩摩川内市
薩摩	僧寺 (不明)
豊後	僧寺 長崎県西海市
豊後	僧寺 (不明)
対馬	僧寺 長崎県対馬市
対馬	僧寺 (不明)

南海道	
紀伊	僧寺 和歌山県紀の川市
紀伊	僧寺 和歌山県岩出市(推定地)
淡路	僧寺 兵庫県南あわじ市
淡路	僧寺 兵庫県南あわじ市(推定地)
阿波	僧寺 徳島県徳島市
阿波	僧寺 徳島県名西郡石井町
讃岐	僧寺 香川県高松市
伊予	僧寺 愛媛県今治市
伊予	僧寺 愛媛県今治市(推定地)
土佐	僧寺 高知県南国市
土佐	僧寺 (不明)

畿内	
山背	僧寺 京都府木津川市
大和	僧寺 奈良県奈良市
河内	僧寺 大阪府柏原市
河内	僧寺 (不明)
和泉	僧寺 大阪府和泉市
和泉	僧寺 (不明)
摂津	僧寺 大阪府大阪市
摂津	僧寺 (不明)

東海道	
伊賀	僧寺 三重県伊賀市
伊勢	僧寺 三重県鈴鹿市
伊勢	僧寺 三重県鈴鹿市(推定地)
志摩	僧寺 三重県志摩市
志摩	僧寺 三重県志摩市(推定地)
尾張	僧寺 愛知県稲沢市
尾張	僧寺 愛知県稲沢市(推定地)
三河	僧寺 愛知県豊川市
遠江	僧寺 静岡県豊田市
駿河	僧寺 静岡県静岡市
駿河	僧寺 静岡県静岡市(推定地)
伊豆	僧寺 静岡県三島市
甲斐	僧寺 山梨県恵寿市
相模	僧寺 神奈川県海老名市
武蔵	僧寺 東京都国分寺市
安房	僧寺 千葉県館山市
安房	僧寺 (不明)
上総	僧寺 千葉県市原市
上総	僧寺 千葉県市川市
常陸	僧寺 茨城県石岡市
常陸	僧寺 (不明)



## 4. 下野国分寺の規模と変遷

下野国分寺は、発掘調査により、創建期（Ⅰ期）以降、3回の改修期（Ⅱ～Ⅳ期）があったことが判明しました。

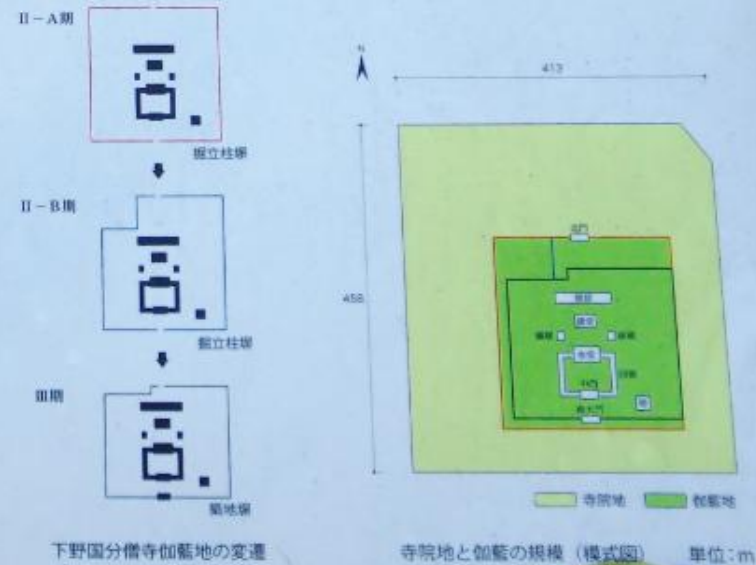
**Ⅰ期**（八世紀中頃） この時期は、金堂や七重塔などの主要な建物を造営している時期です。金堂が完成するまで、仮設の仏堂（金堂と僧房か）を金堂の東に建てています。

**Ⅱ期**（八世紀後半～九世紀前半） 伽藍が整い、下野国分寺の最盛期ともいえる時期です。金堂や七重塔などの主要な建物が完成し、それらを掘立柱扉で囲んで伽藍地とします。扉の建替えからⅡ-A期とⅡ-B期に分かれます。B期の扉は、東と南辺を同位置で建替えますが、西辺を約13.5m東に移し、北辺扉西側の屈折位置を西回廊・僧房の西梁筋の延長線上にあわせています。掘立柱扉に囲まれた伽藍地の外側は、寺院地溝で区画した広大な寺院地が広がっていました。

**Ⅲ期**（九世紀後半頃） この時期に、主要堂塔の大規模な改築・補修が行われました。掘立柱扉から築地扉に改築されます。扉は、東西の位置はほぼ変わりませんが、北辺は45mほど南に、南辺は北に9m移動し、伽藍地が縮小します。

**Ⅳ期**（十世紀以降） 国分寺が衰退し終焉を迎える時期です。主要堂塔では、塔・経蔵は焼失、講堂・回廊は倒壊・解体され、金堂を中心とした寺の機能だけが維持されていたようです。その金堂も軒先が下がってしまい、支えをしていたことがわかっています。寺院地溝も埋まって区画施設は築地扉のみとなります。

中世には金堂跡に小さなお堂がつけられました。この頃から僧寺付近は薬師堂、尼寺付近は釈迦堂と呼ばれたようです。その後、江戸時代後半まで人が住んだ形跡はありません。



## 5. 国分寺周辺の史跡

### 下野薬師寺跡

七世紀の終わりごろ(藤原京の時代)、中央政府において大宝律令の制定などで活躍した下毛野氏の氏寺として創建されたと考えられています。八世紀前半に官寺(国宮寺院)として改修を受け、東大寺・真宗観世音寺とともに「戒壇」が設置された東国仏教文化の中心的寺院です。  
※戒壇は僧侶になるための試験をずるところ

### 下野国府跡

奈良時代、日本の各所には国府とよばれる役所が置かれました。国府は、その国の政治・経済・交通の重要な場所に置かれ、中央政府から派遣された国司と呼ばれる役人のもとでその国の政治が行われました。

### 下野国分尼寺跡

下野国分寺と共に建立された尼寺。国分寺から低地を挟んで東へ約500mの場所に建てられました。下野国分尼寺は昭和39年に発見され、国分尼寺跡として全国で初めて史跡整備がされました。



下野国分尼寺跡 (下野市)



下野薬師寺復元本堂 (下野市)



下野国分前殿 (栃木市)

この導線が軸線で正面前方が南大門方向/右手に標柱が立っている

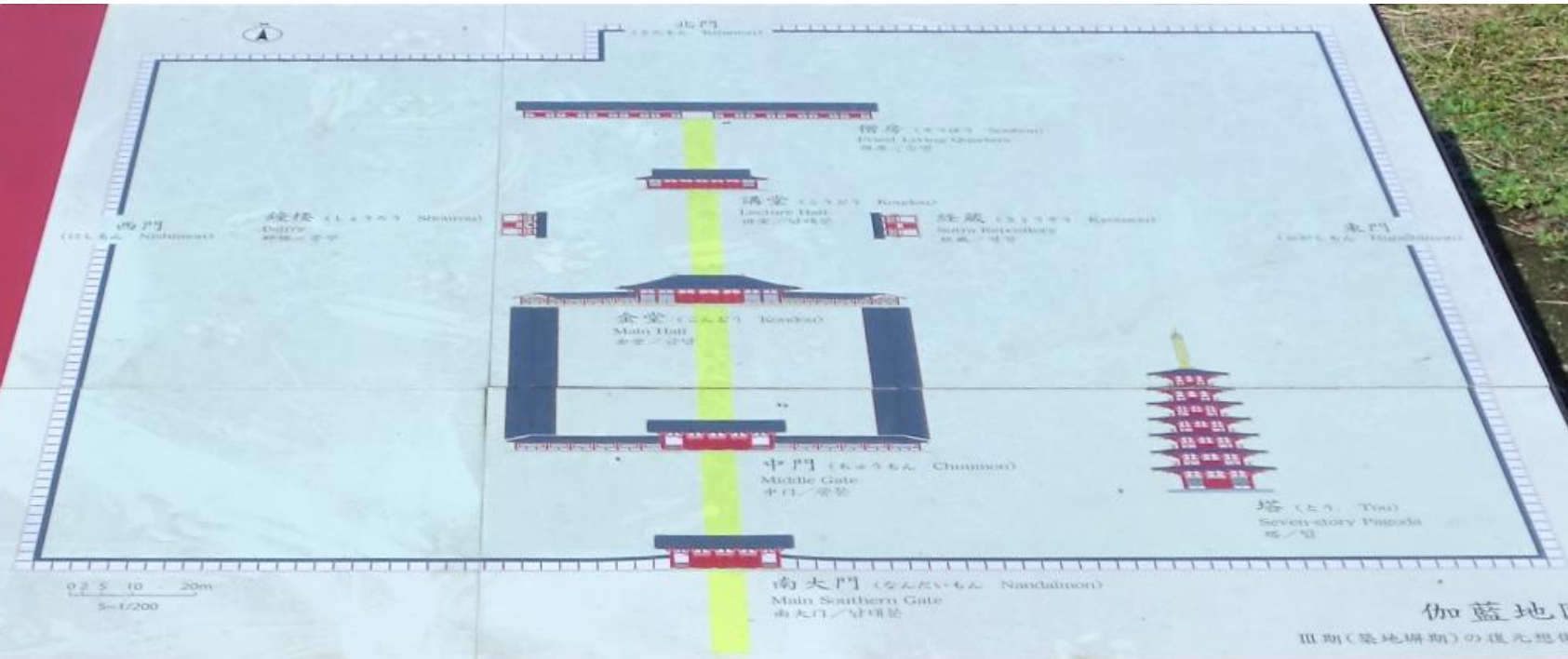






右手に説明坂がある





## 寺院の規模と時期別変遷



下野国分寺跡は、奈良時代の天平13年(741年)、聖武天皇の詔によって全国60数か所に建てられた国立の寺院のひとつです。

伽藍(寺の建物)配置は、全国の総国分寺である奈良の東大寺と同じ形式で南北一直線上に南から、南大門・中門・金堂・講堂・僧房が並び中門と金堂は四廊によってつながっています。塔は四廊の外側東方におかれ、基壇の規模から七重塔であったと推定されています。また、金堂・講堂を抜んで東西には経蔵・鐘樓がおかれています。

これまでの発掘調査で、寺院の敷地が東西413m、南北457mの広さであることや金堂、塔など建物の大きさが判明しました。また、溝や塀などのつくりかえから、伽藍地とその外側を区画する寺院地の範囲や変遷が明らかになり、1〜4期に時期区分されています。

1期(8世紀中葉)は塔・金堂などの創建期、2期(8世紀後半〜9世紀前半)は主要堂塔が完成し、それらの建物を掘立柱塀で囲む時期、3期(9世紀後半)は伽藍地を縮小して掘立柱塀を築地塀につくりかえ、寺院全体を大改修した時期、4期(10世紀以降)は主要堂塔の補修や溝の掘り直しをおこなわなくなる衰退期と考えられています。

下野国分寺の終焉は明確になっていませんが、遺構・遺物からみると11世紀ないし12世紀まで寺院として機能していたと考えられます。



ここが南大門跡/前方に中門跡、金堂跡と続く



左手を見るとこんもりした木々が見える



これが甲塚古墳/二段築成の帆立貝形前方後円墳/6世紀後半の築造/東側から見たところ







# 史跡 甲塚古墳

甲塚古墳は、6世紀後半頃に築造された帆立貝形の前方向後円墳です。墳丘は2段につくられ、墳丘第一段の平坦面(基壇)の幅が広いのが特徴です。

墳丘の大きさは、推定全長80m、墳丘第一段はほぼ円形で、外縁の直径が61mになります。南側は前方部側に張り出す可能性があります。墳丘第二段は全長47m、後円部径34m、前方部長14.5m、前方部前端幅17mになります。

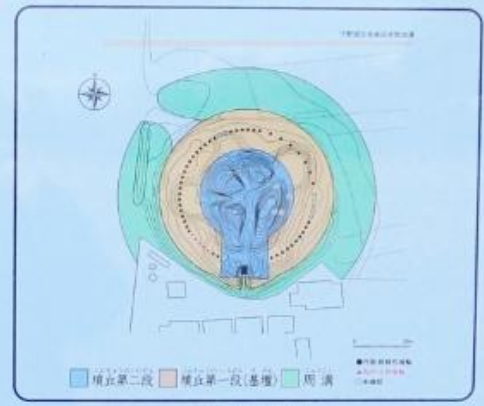
埋葬施設は凝灰岩の切石を使用した横穴式石室が前方部の前端に確認されています。平成16年度の発掘調査により、墳丘第一段で幅約14mある平坦面の中央付近に円筒埴輪が円形に廻ることが確認されました。

墳丘第二段のくびれ部付近からは、馬や人の形をした形象埴輪が、復元できるもので24基出土しました。この埴輪列の中央付近から機織をする女性を表現した、2種類の機織形埴輪が出土しました。

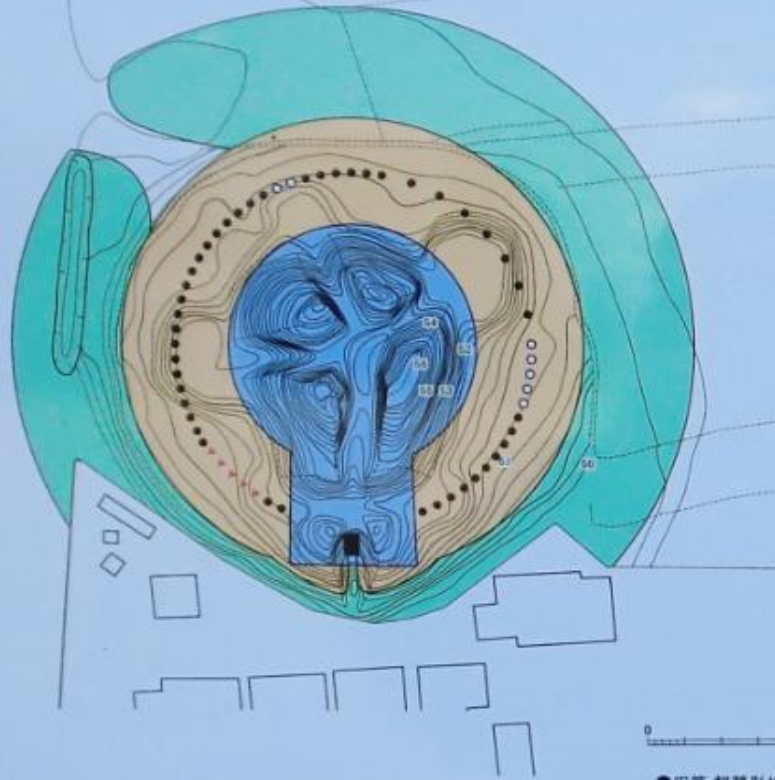
また、形象埴輪列の南東付近からは、360個体以上の土器群が出土しました。この古墳に設置された埴輪には、赤・白・黒・灰色の4色が塗り分けられた彩色が残っており、古墳築造時の埴輪列の様相を復元することができます。

下野市教育委員会

- 種類 史跡
- 所在地 下野市国分寺847
- 所管官庁 国分寺



下野国分寺南边寺院地溝



● 円筒・朝顔形埴輪  
▲ 馬形人物埴輪  
○ 未確認

■ 墳丘第二段  
■ 墳丘第一段(基壇)    ■ 周溝

甲塚古墳測量図

周溝跡



反対側から見たところ



北側から南方向に見たところ



南西側から北東方向に見たところ/右手にはホテルが近接している



東側から墳丘に登ってみる



発掘作業によってか、このように抉られている





こんな塩梅



近くにこんな看板もあった





さて、正面の標示杭には「寺院地溝」と記されている



この砂利のラインが寺院地溝を表しているようだ/西側から東方向を見たところ



振り返って見たところ/東側から西方向を見たところ



その先(寺域の西側)に説明坂があった

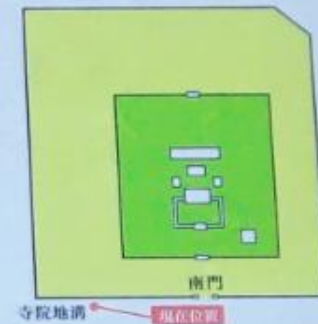


# 寺院地溝 (じいんちみぞ Jiinchi Mizo)

Ditch surrounding the Temple Area

寺院地溝 / 사원지구

※溝の位置と幅を石敷きで表示しています。



## ■寺院地溝とは

- 寺院空間を区切るための溝。

## ■規模

- 東西 413m・南北 458m、幅約2m・深さ約1mの溝。
- 北東隅が折れ曲がっているのは地形の制約(低地)のためと考えられます。南辺は甲塚古墳の周溝を避けて掘られています。

## ■変遷

- 複数回の掘り返しがありますが、10世紀以降は自然に埋まったと考えられます。

## ■現況

- 南西隅・北西隅部は県道の西側です。





ここは寺域の東側で、ここにも同じ説明坂がある



# 寺院地溝 (じいんちみぞ Jiinchi Mizo)

Ditch surrounding the Temple Area

寺院地溝 / 사원지구

※溝の位置と幅を石敷きで表示しています。

## ■寺院地溝とは

- 寺院空間を区切るための溝。

## ■規模

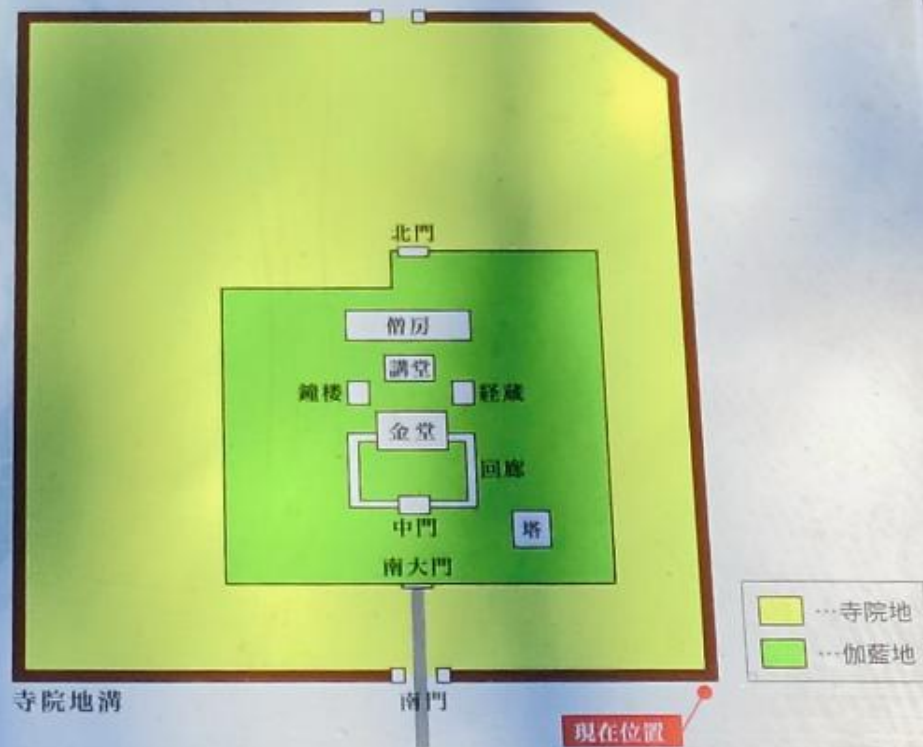
- 東西 413m・南北 458m、幅約2m・深さ約1mの溝。
- 北東隅が折れ曲がっているのは地形の制約(低地)のためと考えられます。南辺は甲塚古墳の周溝を避けて掘られています。

## ■変遷

- 複数回の掘り返しがありますが、10世紀以降は自然に埋まったと考えられます。

## ■現況

- 南西隅・北西隅部は県道の西側です。



東側から西方向を見たところ



さて、ここは栃木市おおひら歴史民俗資料館



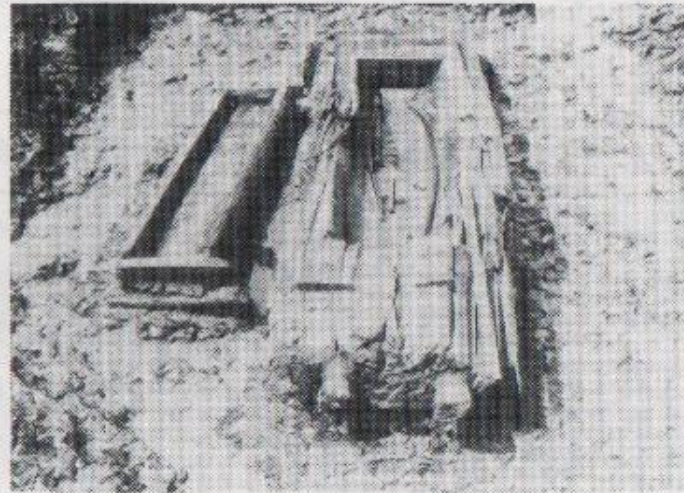




# 1. 下野七廻り鏡塚古墳出土遺物

昭和44年4月13日、宅地造成工事によって削平された下野七廻り鏡塚古墳は、町及び県教育委員会等の関係機関によって発掘調査が前後数回にわたり実施され、その結果、古墳基底部と推定された箇所より我が国最大といわれる舟形木棺や組み合せ木棺が発見された。古墳は高さが5m前後、直径が約30mで巾5～7mの周溝がめぐっていた。墳形は南東にやや広がった楕円形に突起をつけた手鏡型の円墳で、木棺は5m以上の深さにあたる位置から湧水のある青色粘土層に掘りこまれた状態で発見された。築造年代は古墳時代6世紀中頃と推定されている。

出土遺物は木棺をはじめとした木製品、玉纏たままきのたらし太刀(木装太刀)に代表される武具類等で、これまでの古墳出土遺物ではその細部を完全に把握できなかった資料も良好な姿で遺存しており、古墳文化を研究する上で欠かせない重要な学術資料となっている。これら出土遺物は、昭和61年6月6日付をもって国の重要文化財美術工芸品・考古資料として一括指定された。



舟形木棺と組み合せ木棺

こちらは、栃木市おおひら郷土資料館となっている「白石家戸長屋敷」









参考ホームページ

<http://www.city.shimotsuke.lg.jp/hp/page000005700/hpg000005619.htm>

<http://www.city.shimotsuke.lg.jp/hp/page000012700/hpg000012627.htm>

<http://www.ohirarekimin.com/>

<http://www.totitabi.com/oohira/yasiki.html>

<http://www.ohoka-inst.com/shimotukeyakushijiato.pdf>

<http://www.ohoka-inst.com/555.pdf>

[http://www.ohoka-inst.com/kabutozuka\\_kofun.pdf](http://www.ohoka-inst.com/kabutozuka_kofun.pdf)